

滇文化と鶏

余 嘉華[※]

鶏は雲南原住民の生活と思想の中に重要な位置を占めている。鶏崇拝。鶏のイメージは早くも滇文化の各方面に滲透し、内容が豊富で、特色を持ち、滇文化の欠かせない一部を成している。以下は若干の側面から述べる。

原始文化の傑作—鶏型つぼ

いままで中国人の歴史は170万年前の元謀人にはじまる。元謀盆地では我国早期の人類化石を発見ただけでなく、旧石器時代晩期に属する田家村遺跡も発現された。その中に細石器が多数あり、そして原始時代晩期文化を代表する大墩子^{ダイドンシ}新石器時代遺跡も発掘された。

元謀大墩子から二千件近くの陶製品の瓦が出土した数少ない完整品の中で、鶏つぼはととも注目されている。つぼの形はよく肥えた鶏のようで、せなかは弓なりで頭としっぽが自然に上へあがっている。つぼ口は頭で尾よりやや高く、口部分は出ている。側面に目がありせなかの2つの長さの異なる部分は、翼にあたる。体中は点のような模様が付いていて羽毛のようである。足が短い、しっかりしている。造型は生き生きして実用性があると同時に美しい。

ある角度から言えば、人類早期の道具と芸術品は同一性がある。道具はまず実用性に力を置くが、使用の便利及び使用者の快感を起すように工夫している。この快感の中に美感も含まれている。石斧、石刀などのバランスいい造型、表面の光沢などの特色は実用性からの発想だが、視覚芸術に含まれる要素もある。それで、審美の需要と美の価値観が強くなるにつれて、文明人の標準に近い芸術品が表われてきて、彫刻、壁画工芸品などはその類である。実用機能の明確化につれて、それは、日常生活によく使われる道具になり、しかし、両者はときどき結びあつてつぼの造型及び模様、力、剣の造型と装飾などはその表れである。上記の鶏つぼはその中の一例である。

鶏つぼの表れは偶然な事件ではない。客観面から言えば原住民の生活環境と関係がある。雲南は山国であり、森が茂って、山が広く延びている。たくさんの動物がその中で生きている。鶏は人類が早くから捕まえて飼いだめた動物の一つであり、人類と切り離せない縁がある。古人類化石の出土品の中に豚、鶏、牛、羊などの骨が残っている。原住民は鶏を飼うのはその体が丈夫で肉が多く、卵をたくさん産むことを期待している。

鶏の造型から原住民の理想が見られる。めすの鶏を選んで造型するのは、生殖崇拝の意義も含まれているかもしれない。主観面から言えばこれは人類の美意識の発展と関係ある。鶏の美は客観的な存在であるが、人々はそれに近づき、発見してから表現するのは、歴史的な産物であり、

※中国・雲南師範大学中文系教授

創作者の脳の発育、構成、観察、記憶、想像力と表現力に関係ある。古代の原始民の思維の特徴は具体的な思維にあり、抽象的な思維の力が欠けている。日常生活の中に、よく接触している事物に対して、その特徴、形態をよく把握できるので、壁画、陶器の中にすばらしい傑作がたくさん残っている。科学技術部門の測定によると、鶏つばの年代はいままで3210±90年（紀元前1260±90年）でありいままで3000年の歴史のある「滄源壁画」より早い。それで、この元謀大墩子から出土した鶏つばはいままで発掘品のなかで一番古く保存されているものである。雲南の美学史はここから見るべきである。

原始シャーマニズムの重要な内容、鶏での占い

「靈魂」観の発生、原始宗教及びその儀式的形式は歴史前の文化の重要な内容である。雲南の原始宗教の形態は自然崇拜、動・植物崇拜、シンボル崇拜、祖先崇拜、生殖崇拜などがある。祀りの形態は農業、牧畜、建築、誕生及び葬送の儀礼の中に表われて来る。これらの儀礼を行う時、だいたい「神様に通じる」といわれる巫者（彝族のピモ、景頗族のトウモ、ナシ族の東巴が担当する。巫者たちは程度の差があるが、シャーマンと経典がわかる。シャーマンは原始宗教の主要部分で、その中で、道具を利用して（或いは自然現象）未来を予測する原始占いは重要な内容である。占いの道具はたくさんあるが、鶏の骨、卵はよく使用されるものである。

彝族の「^{ピモ}薩摩」は占いをする時鶏の骨をよく使う。元の時代の李京が著した「雲南誌略」の中に諸夷風俗について、こう書いている。「侈、鳥蛮というものなり。男の巫者がおり、四大巫婆と呼ばれ、鶏の骨で物事の吉と凶を占う。」明の時代の李元陽は「雲南通誌」の中にこう書いている。「侈……、鶏の骨で占いを行う。物事は大小を問わず、すべて巫者に占ってもらおう。」道光時代の「雲南通誌」には占いの作法を記述している。

「取雛鶏雄者生刳、取兩髀束之、細剖其皮骨有細竅、刺以竹筴、相其多寡向背順逆之形、以占凶吉」。清の黄炳堃『南蛮竹枝詞』の中には、「山吉鶏卜詔光知、鷓黑形容有異姿」また「覘讎邦瑪都無有、剝尽雄雛病未刪」とあり、すこぶる形象に富んでいる。

景頗族の占いは巫者「^{トウサ}洞薩」により行う。「騰越州志」の記録によると鶏の占いをする時、おすの鶏を捕って神さまの前に或いは空に祀り、殺して骨を二つ取り出してきれいに洗う。糸で縛って、竹のくしを真中に挿し込む。骨の上に細かい穴があるが挿し込んでくしの状況により、凶と吉を判断する。まっすぐに挿し込んで多くある方は吉で、反対だったら凶である。その時よくこういう占いで結婚、墓の方向、宅の風水、及び出かけ、戦争を見る。

伍族でよく使う鶏の骨は、巫者「^{モバ}魔巴」が経を唱えてから鶏を殺し、その左右の股骨を取り出して使うものである。二つの骨の下側をそろえて糸でV型に縛り、細い竹のくしを骨の穴に挿し込む。占いを頼む人の要望により、凶と吉を測る。話によると、吉と凶はそれぞれ8種類もあり、凶だったら、鶏と骨を一緒にすてて、吉だったら巫者がそれを保存して家神の近くに掛ける。

そのほか、傣族も鶏骨で占いをすることがある。「景東万誌」の記録にこんな記録がある。「樊夷は物事の凶、吉を測る時、鶏の骨で決める。」布朗族、壯族も鶏骨で占う風俗があり、同じよ

うな記録が残っている。基諾族も鶏骨での占いがあり、その民族の言葉では「ヤイト」と呼ばれる。鶏を殺したり食べたりする時、必ず骨を取り出して占いをする。だいたい足の部分の骨を使い、その穴の数を見て測ったり、或いは穴にくしを挿し込んで、そのくしの形態により凶・吉を判断する。巫者は鶏骨を使う以外に卵もよく使う。彝族の人々は結婚する時、よく鶏の舌をみて、凶、吉を占う。以上で述べたように、鶏の占いは雲南の原始シャーマニズムの中に重要な位置を占め、歴史が長くて影響が深い。いまでも、よくその形が見られる。その中に比較的によく保存されているのは小涼山彝族の鶏占いである。占いに使う鶏の骨は多く、識別も複雑である。たとえば、鶏の頭で占う時、ゆでた鶏の頭を取って皮と肉を取り除いて、骨の色を見る。黒色或いは赤にしみる黒だったら、吉で家内安全、財産が増えて貴いお客さんが来ることを意味する。頭の骨が白い色だったら、運は普通で、凶もなし吉もない。二つ目のポイントは鶏の口が開いているかどうかことである。口が開けるのは凶で、災難が来る。口が閉じているのは吉で家内安全、収入が増える。三つ目は鶏の舌骨を見ることである。三本の舌の骨の中には、真中は家長を代表して左と右の各一本は家族内のほかのメンバーを代表する。男は右で、女は左である。三本の舌骨はまがっているなら吉で、家族とも繁盛であるが、真中の骨は偏っているなら家長に不幸があることを意味している。左・右の骨は後へまがれば、家族のメンバーは不幸があることになる。もし、三本とも後へまがるなら、人でも、動物も災が来るという意味である。(楊学政著「小涼山彝族の宗教」を参考せよ。)各地では、占いの方法はそれぞれ違うが比較的標準な解釈も存在している。占いは実質から言えば唯心主義であり、封建迷信の類に属するが、占いを行う者はだいたい当地の知識を持つ方で、世間のことごとをたくさん見てきた。頭の思惟が活発で話し上手が多い。天文学、気象、地理、医薬学の知識も少しずつ通じているから、これらの知識や経験に基づいて占いを求める人の困難を分析、判断し、その答えが問題によって真実に近いこともあるから当たることが多い。占いの謎の裏に科学的な知識が隠れている。これらの知識は何世代の人々が積み重ねてきて、代々口から口へ伝わるものだから、伝わる過程の中に修正が入り、ますます真実に近づいていく。占い書によって伝わるものもある。巫者は当地では世代継承するのが多く、かなり名誉が高い。占いをおおい包んでいる霧をわけて見たら、その中の合理的な内核が見える。とくに、少数民族の原始的な科学技術に関する知識が含まれている。

占いは原始シャーマン文化の一部として、原住民の自然を征服し、社会をコントロールして、願いをかなえるための文化現象である。現在の科学知識、社会発展の規律に基づいて未来を予測する未来学と通じる所があり、占いから未来学の出現までは、側面から人々の思想の進歩を表している。

鶏羽を飾り物とする踊り、羽人舞

羽人舞の図は雲南古代芸術作品の中によく出ている。3000年前の「滄源崖画」の中に、第一地点2区の左の端に、頭に羽毛を挿している人像がみえる。一人は風に向かって踊り、羽は後へ曲がっているがもう一人は歩いているようで羽毛が短い。そして第7地点1区、2区、4区、5区

に皆羽人が出てくる。

普通、人の頭に二本羽を描いており、長い羽毛の横に短い横線を描いているものもある。或いは頭の上に短い線を描いて、羽の長さを表している。羽でポンチョのような物を描いてある場合もある。(例えば、第1地点第4区左上にある人像、第6地点第4区に描かれた人像)。ある人像は頭に羽毛を挿し、両手には何にも持っていないが、ある人像は器物を持ち、踊っている模様が描かれている。春秋戦国時代から西漢時代に作られた云南青銅器の中に、羽人舞の模様もよく出て来る。特に銅鼓と貯蔵器の模様によく見られる。晋寧山石寨山から発掘された陶器の上に、羽を挿して踊る人が23人も絵かれている。動作は調和で、リズム感が強い。開化銅鼓の鼓面に4組計16人の羽人舞者がある。

このような踊りは雲南の古代の各民族の中によく見られる習俗である。李京が著した『云南志略』の中に次のように書かれている。「金齒百夷……遇破敵……髻挿雉尾，手執兵戈，繞俘而舞」，「蒲蠻……首挿入雉尾，馳突如飛」。清代の檀萃が著した『滇海虞衡志』には「樊夷……官民皆冠箬葉，……遍挿翠翎」，「窩泥……頭挿鷄尾跳舞，名洗鬼，忽無忽歌」，「拇鷄……蓬頭椎髻，標以鷄羽」，「野人……首帶骨圈，挿鷄尾」などとある。道光の「雲南通誌稿南蛮志」の中に「皇朝職貢図」を引用している。「濮頓，…男子は髪を束ねて鷄羽を挿す。」鷄羽習俗分布の広さがうかがわれる。

これなど飾り物用の羽は多数が彩色で長い。その動物の類を見れば皆鳥綱，雉科に属し，鷄の中の違う品種である。主に以下の品種で見られる。

「野鷄」雉，雉鷄とも呼ばれる。雄鷄の体の長さは1メートル近くあり，羽がきれい。首に白色の花紋がある。雌鷄は体が小さく尾が短い。羽は茶色で斑が見える。尾の部分の羽はよく装飾に使う。

「箬鷄」，長尾雉とも呼ばれる。雄鷄の体の長さは約1.5米（尾の長さ1.2米を含む）で羽の色が鮮やかである。体の上半部は黄色で，紅と白，黒と茶色の斑がある。雌鷄の尾が短く，体の長さは雄の三分の一つである。頭と首の部分は白色で，額から目の後まで黒い模様がひとまわりある。尾の羽はよく帽子の飾りに使い，雄鷄の皮はそのまま装飾に使える。

「錦鷄」，金鷄とか紅腹錦鷄とも呼ばれる。雄鷄の体の長さは約1メートルで頭の部分に黄色の冠があり，首まで覆っている。羽の色は非常に豊富で，背の上半は緑で黒びているがほかの部分と腰の羽は金色で腰の側になると深い赤になる。尾の半は多数が黒色，茶色で班のようにまじっているが，端になると褐色になる。腹の色は喉以下ほとんど深い赤になっている。よく岩石とか坂地帯で生息し，我が国の西南部の特有の動物である。皮はそのもの装飾品に使うが尾の羽もよく帽子の飾りに使う。

そのほか，雲南の「茶花鷄」（原鷄），「碧鷄」（孔雀）の羽もよく装飾に使う。

上記の鷄は分布が広くて，飛ぶのが苦手だから，つかまえやすい。羽の色，特に尾の羽の色が鮮やかで，長くてきれいから，原住民たちはそれを装飾に使うのは想像できる。鷄羽を主として，ほかの羽毛も交じって使えばもっと色が豊富になるから，よく見られるわけである。

鶏の羽を装飾にする風俗は民間から宮廷に流れ込んでいる。昔の宮廷の礼儀作法の中に「鶏尾扇」というのがあり、段、商の時代に表れ、周の時代になると、皇后に使い、魏、晋の時代に諸候にも使われた。その形は下が四方形で上半は丸く、真中に孔雀の刺繍がある。囲りに鶏羽尾を並べて装飾する。杜甫「秋興」の中に「雲鶏尾に移り、宮扇を開く」の句がある。羽を装飾に使う習慣は中国伝統戯曲の中にもよく見られる。劇曲の中に「翎子生」、「雉尾生」と呼ばれる役があり、頭に雉尾を挿すのは印で、文、武とも優れる人物である。例えば「群英会」の中の周瑜、「穆柯寨」の中に楊宗保などはその代表である。羽を装飾に使う風俗及び羽人舞の影響の深さが窺える。

原始鶏崇拜の軌跡、塔頂金鶏と鶏の冠帽

雲南陸良県にある大覚禪寺に干佛塔があり、元の時代に建てられ、六角七階の煉瓦作りで高さ17.79メートルである。周辺に「龕」を作り、内に佛像を置き、全部で1612個がある。塔の頂上南方面に銅で作られた「金鶏」が一組ある。そのゆえに、「金鶏塔」とも呼ばれる。

昆明市の南に東西寺塔があり、唐代に作られたものである。西寺塔は方形13階の塔で、高さ31メートルである。台基は3階あり、明代の弘治年間地震のために被害を受け、修繕を行った。東寺塔は同じ13階で、高さ40.53メートルがあるが、清の道光年間に地震のために倒れて、光緒年間で東へ数百歩ぐらいの距離を移動して新しく作ったのである。話によると東寺塔の頂上に四匹も「金鶏」がいて、冬と早春の風が強い季節に鳴き声も聞こえる。調べたら、この四匹の「金鶏」はすべて銅製で、金を貼っている。一匹は高さ約2メートルで、口に両側に穴が銅管がある銅管があり、管内に金属の片がある。鶏の頭、頸、腹は全部開いているから、強い風が吹くと空気の振動により、きれいな鳴き声聞こえる。職人のすばらしい技術が見られる。関係者の話ではこの金鶏は「金翅鳥」とも呼ばれ、佛経「探玄記」の中に龍を降伏する力があると記しているから、人々はこれを塔の頂に置いて水害を鎮めようとしたのである。この説も道理がある。

古代では滇池の水域は現在より広くて東西両寺は滇池に近い。現在東寺街の中に「魚裸寺街」という地名があり、昔の滇池の岸辺の魚市場であろう。明の時代の初期、雲南の有名な詩人敦文は「湖勢欲浮双塔去，山形如拥五華来」の句がある。しかし「金翅鳥」は人々の印象の中では金鶏であるから塔上の鳥は鶏の形をしていて、人々も皆「金鶏」と呼んでいる。

これと似た話に、大理にある崇経寺三塔がある。主塔の干尋塔の四角に昔は四匹の「金鶏」があったそうである。同じように「金鵬鳥」と呼ばれる。話によると、「龍は塔を尊敬して、鵬を怖がる。」大理は元来龍澤であるからこれを持って鎮める。現在金鵬はもう存在していないからその形を察知することはできない。

金鶏を塔の頂に立たせるのは、中国の伝統思想とも関係があるようである。「鶏」と「吉」は発音が同じで、鶏は吉祥のシンボルである。「韓詩外傳」の中に鶏は文、武、勇、仁、信の五徳がある。「花鏡」は具体的に「雄鶏は邪を避けられる」と書いて、王徳は「頭に冠があり、文である。足がしっかり立ち、武である。敵を見たらすぐ戦い、勇者なり、食事の時友を呼び仁であ

る。夜の番は忠実で信である」と説明している。唐代では女性が雄鶏が胸の中に飛んで来ると妊娠して子供を生み、その子は成人して名将になる話もある（「新唐書」巻86劉武周傳）。当然搭頂の鶏は雲南本土の神話—金馬碧鶏」の伝説と関係あるが詳しくは後に述べる。

雲南原住民の鶏崇拜は服飾にも表映している。特に彝族の「鶏冠帽子」である。滇南地方と昆明阿拉郷の彝族の女の子は三才から鶏冠帽子をかぶる。帽子の型は雄鶏の冠みたいで、黒色の布で作られ、縁に二つの線がはいて、中に桂の花があり帽子の上に赤いボールが二つあり、彝族の言葉では「サニマト」と呼ばれる。造型はおもしろく、きれいだから女の子がかぶるともっと美しく見える。

時代の発展に伴い、彝族の「鶏冠帽子」は明、清の時代の記録のような「男は鵲帽子、女は鶏帽子」の形はだんだん抽象化芸術化し、いまでもこの跡が見える。鶏冠帽子の製作と使用は早い時期の動物崇拜と関係ありこの間の関係も研究すべきである。

漢代から文字記録のある神話、金馬碧鶏

漢の時代に生きていた班固は永平元年から建初七年（紀元58—82年）までの間に書き上げた『漢書・王褒傳』の中に以下の記述がある。「漢の宣帝の時、益州は金馬碧鶏の宝があり、祀るべきである。宣帝は褒を使い、祀りに行ったが途中で褒は病死した。」当記の本の巻25の中に同じような記録を残している。『地理誌』の中に越嵩郡青蛉について「禺同山」に金馬碧鶏がある」と説明している。西晋時代（紀元266年—315年）の左思もその作品の『三者賦』の中に「金馬騁光而絶影、碧鶏倏忽而耀代」の句がある。東晋永和年間に（345—350年）完成した常璩の『華陽国志』の中に具体的な記述がある。滇池県についてこう書いている「長者たちがこう言う。池の中に神馬があり、交媾したら子馬が生まれる俗称は「滇池駒」で一日に五百里も走れる。」また「黄帝の時、蜀地方の郡主は益州の太守で、功績が著しい。神馬は滇池の中に出没して雨が降り白鳥が表れる。それから文字が使いはじめて、習俗もだんだん変わる。」また蜻蛉県についてこう説明している。「禺同山有碧鶏金馬、光影倏忽、民多見之、有山神。漢宣帝遺諫議大夫王褒祭之、欲致鶏馬。褒道病卒、故不宣著。」南朝の史学家范曄（紀元398—445）が著した『後漢書』の中に「青蛉県禺同山には碧鶏金馬があり、姿は時々表れる。」の記載があり、また、注に王褒の『碧鶏頌』の次の一節を引用している。「持節使王褒謹拜南崖、敬移金精神馬、縹碧之鶏、処南之荒、深谿回谷、非土之多。帰来帰来漢德無疆、広乎唐虞澤配三皇。」しかし、金馬碧鶏を神のように祀るのは原住民たちの誤解である。

金馬碧鶏神話は原住民の動物崇拜であると同時に、原住民たちの創造である。現実生活のうえに想像を加えて自然を征服し、支配する願いの表現である。豊富な想像をもって、原住民の未来生活への熱望を表し、優美な神話である。古代の滇中地方では滇池沿岸及び楚雄辺りを含めて森が茂って気候が良い。原鶏、野鶏、箐鶏、錦鶏、孔雀などがここで生息して、原住民たちに好まれて崇拜のようになる。そして「碧鶏」の神話も変わって来る。原型は錦鶏であり、孔雀である可能性もある。二者とも吉祥のシンボルで、特に孔雀は、羽が緑色で尾を開ける時は吉祥だと思

われ、色から見ればもっとも「碧鷄」に近い。孔雀の里は孔雀神話を生まれて来るのも当たり前である。滇中地方は草が茂って山地が広いから畜牧にも適して、良い馬を産出している。古代から滇馬が全国で有名である。それに雲南では山が多く川も多いから、交通が不便だから馬は人々の生活の中に重要な地位を占めている。馬を放牧している原住民たちは、「天馬」の出現を想像して理想な「千里馬」の繁殖を期待するのも当たり前である。神話が創造されたら人々の理想と願いを含んでいるから、すぐ人々に認同され、早く広がって宮廷まで流れ込んだ。そして王褒の雲南行きがあったわけである。

金馬碧鷄神話の伝播する過程において変容もあった。唐と床の時代に仏教が雲南に伝わってきて統治者の提唱もあったからすぐ隆盛になった。

金馬碧鷄神話も仏教者に利用され、改造された。この筋は床代の末ごろから元代の始めごろまでの雲南張道宗『紀古滇説集』、明代倪輅『南詔野史』の中に記録されている物語から大体的内容がわかる。この二冊の書の中にこう記述している。金馬は元々印度の仏教提唱者阿育王の馬である。阿育王の三人の息子は皆その馬がほしい。そして阿育王は、馬を走らせてそれに追いかけた者に馬を送ると約束した。末子は昆明東山で馬に追いかけた。その山は現在の金馬山である。長男は二番目について、昆明の西山で碧い鳳凰に会い、そこに止った。その山は現在の碧鷄山である。二人もそれぞれ山神になっている。仏教徒は伝説の中に滇池で没する金馬を仏教者の乗り物に想定し、碧鷄も仏教徒と会って吉祥になる「碧鳳」に替えた。自然崇拜から生まれた神を仏（阿育王王子）に変わったから人々が金馬碧鷄を崇拜するのも仏教を信じるのと同様になる。神話をもって仏教を宣伝する目的は一目でわかる。これも宗教は民間説話を利用する典型的な例である。

仏教の伝説は信用できないが金馬碧鷄神話の重心は昆明に移り、その伝播はまた仏教のルートを増やしたことを説明した。客観的には金馬碧鷄の影響を拡大したとも言える。それに、この伝説は金馬碧鷄二つの山の名前の歴史が長く、唐の時代の前にすでに存在したことを表した。『南沼徳化碑』の中に「山対碧鷄 波環碣石」の句があり、樊緯が書いた『蛮書』の巻2には、金馬碧鷄の二山が「西南西北相對して…山の中に神社がある」と記載している。明の時代の劉文征天啓の『滇志』の中に「金馬神社」は城東の金馬山の麓にある」と書いている。しかし、彼は二つの神社を仏教と道教の中に入れず、「群祀」の中に入れており、庶民の自発的な信仰に重点を置くところは客観的である。

2000年近くの伝播によって、金馬碧鷄の観念は人々に受け入れられて雲南各民族の精神に根付いている。

雲南は神話の国である。金馬碧鷄神話は雲南でもっとも早く文字で記録された神話であり、その定型は早く、土着性が強い。また、その伝播の範囲は広く、深い影響を及ぼしており、雲南の神話史文学史及び文化史の上に重要な地位を占めている。

碧鷄詩

美しい金馬碧鷄神話は多数の詩人の注目を集めた、元の時代の雲南の詩人王州は『滇池賦』の中に「碧鷄峭拔而岷嶽金馬透迤而玲瓏」の句があり、上手にその景色を表現した。同じ元代の鄭衍は雲南で、官吏を勤めたことがあるが、彼も『碧鷄山』という題目の詩の中に「中戾西南來有山勢雄突」などの描写がある。詩人郭進城も『碧鷄山詩』の中に「碧風一飛去，空留碧鷄名。寥寥千載下，徒仰山儀形」と懐かしい気持ちを書いている。明と清の時代になると、金馬碧鷄に関係する詩がもっと多くなり「碧鷄」だけ詠た詩は数十首もある。詩人たちは碧鷄に引かれて、なかなか忘れられない。明の時代の袁森は『碧鷄山』という詩の中に「凌霄傍海碧崔嵬 中有神鷄數往來一自王褒旋旆后 至今煙雨不曾開」の句がある。明代洪武年間、雲南に流された日本の詩僧機先はその著書『梁王閣』（方志の多くは『碧鷄山』と題している）の中で、「碧鷄去已千秋，聞說梁王曾比遊。洞口仙桃迎風聲，岩前官柳系龍船。青山有恨人何在，白日無情水自流。豈識當時歌舞地，寒烟漠々鎖荒丘」などの詩を著した。又、『滇陽六景・碧鷄秋色』の詩に「碧鷄西望水天虛，漠々秋光畫不如」とあり、いずれも「碧鷄」にことよせて歴史の興敗を歌ったのである。清初の周謙吉は『碧鷄山』の中で、「天涯游子自栖々，独上晴峯吊碧鷄。……大都山色看來碧，那有鷄聲聽處啼」と記し、自分が旅した風景を表現した。鄂爾泰の『登安阜因望金馬碧鷄山』の中には、「碧鷄金馬神仙窟，踏月梯雲結構牢。欲攝塵踪訪靈迹，漢廷舊已薄王褒」とあり、鄂は朝廷の封疆大使で、碧鷄神話に憧れていた。碧鷄をテーマにし、詩や歌で自らの感情を描写したものもある。明代永樂年間、昆明詩人郭文も『竹枝詞』の中で、金馬何曾半步行，碧鷄那解五更鳴，農家夫婿久離別，恰以兩山空得名」比喻の新しさと地方色の豊かさが特徴的である。別の詩人施敬は『登碧鷄山寄陸伯瞻劉子傳』の中で、「碧鷄山頂登臨處，一片蒼烟迷海樹。回首章台若個邊，青天不盡山無數。欲倩西風吹雁書，拂雲遥寄故人居。書中草々無多字，但道相思會面疏」と歌った。前述した郭文の詩は閨房の哀れを描写したものとすれば、施敬の詩は友を偲ぶ内容といえることができる。作者の感情は目の前の情景から、ごく自然に生じたものであった。顧起倫の『碧鷄關』の中の「桐花如霰存空山，山里行人早出關。自収羈心千萬里，停雲騁望碧鷄關」の詩句は遠い故郷を懐かしく思う作品である。清台嘉慶年間、雲南按察使に任じられた李鑾宣の『金馬篇』には、「金馬碧鷄相對愁，昆明池水山前流。去年霪雨六十日，池水泛溜田行舟。木塵漂沒魚上樹，災更甚者安寧州。宣良晉寧亦被水，左々一片江湖秋。今年五月水未涸，渲洩不及禾無收。左人立法本盡善，注茲挹彼開田疇。筑以石堤防以堰，陽陽相度之頻修。近人不歸占人意，虛糜國帑無良謀。惜哉神禹久不作，民其為重將誰尤。賣兒鬻女草間活，乞人稠比稠人稠。監司大吏例得注，一勘渠吏匍迎超。歸來開宴屠牛羊，樽前婉轉開歌喉。開歌喉，大府笑，明日西台更相召。膏粱醉夢日月昏，不知四野哀鴻叫」の詩篇は、老百姓の苦しみと作者の憤りの情を表したものであった。「金馬碧鷄相對愁」の“愁”は、老百姓の苦しみを表現しており、この“情”は千万人民の心に通じるものであった。もう一首同じく李鑾宣が書いた『碧鷄關』の詩では、主に先人が鷄を下に見る，鳳を讃えることと王褒の『祭金馬碧鷄文』についての批判を，次のように書いている。これは「鳳兮鳳兮爾何恋，屑與燕雀爭糝糖。燕雀回頭顧之笑，網夢滿地其奚賜，鳳有

五倫鷄五得，何必有意為低昂。家鳴野鶩等閑事，但養毛羽皆輝光。噫吁嘻，鳳非真鳳鷄亦誤，當關虎豹猶々怒」である。作者が詩の中に鷄と鳳はそれぞれの特色があるため、一方を讃えて、一方を低く見るのは必ずしも当たっていないと指摘した。しかも、鳳の方は翼も広げられないので、それほど羨ましがらる必要はない。この詩篇には作者自らの官職生活や朝廷内部鬭争などの当て付けがこめられているだろう。「碧鷄」をテーマにした詩には、地元の風俗民情について書いたものもある。例えば、明代の顧起倫が書いた『碧鷄山』には、「人家隱碧鷄，鷄聲出雲樹。層翠結午陽，繁紅變晴雨。寂々春山深，客來敲澗戸」のような、農村風景ののどかさを描写した詩がある。また、ある日、彼は安寧へ行く途中で、碧鷄關で武定彝族の女官と会った。その出会った様子を次のように記した。「碧鷄關下鳳君過，白頭紫綬錦闌那，毘盧冠子犀皮靴，子蛮細馬雕鞍馱。青鵲巢白鵲巢（原注：夷人の帽子は細かい青白の鳥の毛で作ったもので、鳥巢のような形である），鬚髻半額交双娥。前軍後軍齊踏歌……」，まるで一幅の民族情緒豊かな絵画を思わせるような描写である。清代康熙年間、呈道銘の『碧鷄山』には、「未到關前聽碧鷄，半山紅日漸沈西。東風留得遊人屐，吹破桃花一樹齊」の詩がある。また、乾隆年間雲南回族詩人沙孫が書いた『碧鷄關』には、「黔道濛々已厭山，昆池如掌一開顏。却看縹碧飛雲里，正好四翔舞鏡間」とあり、ここからも分かるように、作者の故郷の滇山雲水に対する熱愛が溢れている。

ところで、たくさんの“碧鷄詩”の中でも、清代河陽の名士趙士麟が書いた『碧鷄詩』は最も有名である。

彩雲一片舞天鷄，五色光中望欲迷。

化作青山千載碧，王褒空自渡巴西。

この四つの詩句には碧鷄の輝いている形象、神秘的な姿、碧鷄山との関わり及び漢代の王褒に関する物語などの豊富な内容を見事に表現している、しかも詩句は朝霞のように千変万化し、生きる希望を表すがごとくである。

鷄崇拜の発展——金馬碧鷄坊と昆明市——

金馬碧鷄の神話が広く伝わり、「金馬鍾秀 碧鷄呈祥」の觀念もますます人々に受け入れられるにつれて、人々はその意味を広げ、いろいろな意味深い文化現象が発生した。

まず建築物から見てみよう。人々は金馬、碧鷄山の麓に神を祀る神社を作り、金馬と碧鷄の神を祀る。そして二つの山の麓に金馬と碧鷄の関を設置して、昆明を守る。城内で二つの「坊」を作り、昆明市のシンボルにしてその所在地を金碧路と呼ぶ。金馬、碧鷄の二つの「坊」は雲南古代建築の代表作で、国内外で有名である。

金馬、碧鷄二つの「坊」は昆明市内の中心線の南に位置し、現在の正義路と金碧路の交差点から約十メートルのところにある。東は金馬坊で、西は碧鷄坊である。明の時代の宣徳年間（紀元1426—1435年）に建てられた高層の木造建築である。基石は長方形の石で作られ、間中の部分は約11メートルあり、両側は高さ約8.5メートルである。対称型で、羽を開けて空へ向かって飛ぶようである。金を貼り、彩色にしているので、日射しの下できらきらと輝く。明の時代の景泰

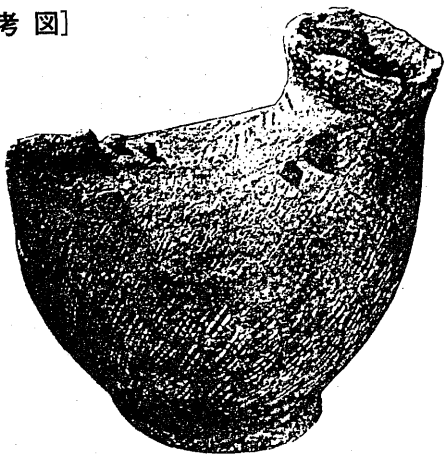
六年（紀元1455）が書き上げた『雲南図経』巻1にこう書いてある。「城南の三市街に、碧鷄金馬二坊がありこの地方の名称になっている。明末の1657年戦争のため壊された。清の始めごろ建て直し、また咸豊七年（1857年）に戦火を浴び光緒三年（1882年）人々の募金で作直す。坊に書かれる「金馬」「碧鷄」の字は呈貢孫清彦の作品で、力が強い。1949年から、何回も修繕されたが、文化大革命の中に壊された。

金馬碧鷄二坊の北の方向に寛典赤を記念するために作られた「忠愛坊」があり、市街地で「品」字形に立っている。神話の中の金馬碧鷄は有名な朝廷の封一大臣と一緒に立ち並ぶのは昆明市の特有の景観になっている。民間ではこのような伝説がある。金馬と碧鷄二坊の構造は巧妙につくられており、特定の年と季節のある日、夕日が西に沈みつつあり、月が東から登って来る時に、日の光と月の光が同時に東と西から射し込んで、二つの坊の倒映が見える。二つの倒映が少しずつ移動し、交差した瞬間「金碧交輝」のすばらしい景色が現れる。話によると、清代ではほんとうに見た人がいたという。もし、これが真実だとしたら、二つの坊の中には人々の智慧が隠されている。

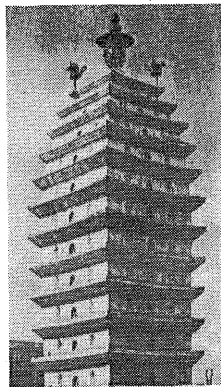
金馬碧鷄二つの坊は現在は存在していないが、金馬碧鷄の姿は深く人々の心に刻まれている。数年前にたくさんの議論を重ねた結果、金馬碧鷄の姿は芸術家たちの加工を経て、昆明市のシンボルマークになっている。飛ぶように胸を張っている馬ときれいな声で鳴いている鷄の姿には新しい社会に生きる昆明の人々の感情と精神が込められており、新しい時代の姿を表している。

以上はわずかのいくつかの側面からの例しか挙げられなかったが、鷄崇拜と鷄の姿は原始芸術（鷄つば）、原始宗教（鷄占い）、原始崇拜（鷄の冠帽子）原始舞踊（羽人舞）、早期神話（金馬碧鷄）及び後期の文学作品（碧鷄詩）、建築物（塔、坊）など各分野に滲透している。その影響は何千年にわたり、現在も活躍している。金馬碧鷄を名前とする村、町、学校、病院、工場、デパート、会社があり、金馬碧鷄をマークにする商品も多い。碧鷄カップ、金馬カップと名乗るスポーツ大会も多数あり、金馬碧鷄も昆明市のシンボルマークとなっている。その生命力の強さと影響力の深さは多いに研究価値がある。

[参考図]



鶏形陶



東寺の塔頂の金鶏



緑孔雀



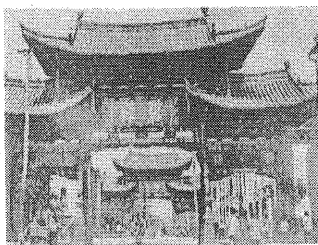
錦鶏



環頸雉



長尾雉



鑄・碧鶏坊



昆明のシンボル



銅鼓紋に描かれた羽人



滄源崖画に描かれた羽人舞

